The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学における言語学習支援の展開 ： ポストコロナを見据えて
Author(s)	義永, 美央子; 瀬井, 陽子; 難波, 康治 他
Citation	多文化社会と留学生交流 ： 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2023, 27, p. 85-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90848
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学における言語学習支援の展開

―ポストコロナを見据えて―[1)]

義永　美央子*・瀬井　陽子†・難波　康治‡・角南　北斗§・韓　喜善**

要　旨

本稿は、大阪大学国際教育交流センターにおける言語学習支援の実践報告である。2022年度の特筆すべき事項として、OUマルチリンガルプラザでの対面での活動が本格的に開始されたこと、および、同様の取り組みを行う学内他部局との意見交換会を初めて実施したことが挙げられる。今後の課題として、支援に従事する大学院生を対象とした研修の実施、部局間の協力・連携体制や支援者ネットワークの構築、それらを通じた学内の言語学習支援体制のさらなる充実が求められている。

【キーワード】言語学習支援、ポストコロナ、SALC、支援者育成、部局間連携

1　はじめに

2022年5月現在、大阪大学には2,591名の外国人留学生が在籍している。大阪大学国際教育交流センター（以下CIEE）では、これらの留学生に対する日本語教育を行っているが、研究活動の多忙さ等の理由で授業に参加できない留学生や、授業外での自主学習を必要とする留学生の支援が課題になっていた。また留学生と一口に言っても、実際には母語・専門・日本語学習歴・どのような日本語学習を必要とするか（日常生活のための日本語か研究活動を行うための日本語か、卒業・修了後に日系企業等への就職を予定しているか等）が大きく異なり、個々の特性や学習ニーズに応じたきめ細かい指導や支援が必要とされる。さらに、CIEEが提供している日本語教育プログラムは、大阪大学の学籍を有する学生を対象とするため、外国人研究員・ポスドク、教職員等の日本語学習ニーズには十分応じられていない面があった。これらの課題に対応するため、CIEEでは数年前から日本語の自律的な学習を支援するシステムの構築に着手し、セルフアクセスラーニングセンター「OUマルチリンガルプラザ」と日本語学習支援のためのポータルサイト「OU日本語ひろば」を開設・運用している（OUマルチリンガルプラザの実施主体はマルチリンガル教育センターであるが、国際教育交流センターはその準備段階から企画に関与し、開設後は日本語学習支援の部分を担当している）。これら2つの取り組みについては、かねてから本紀要にて報告を行っている（義永他，2020; 2021; 2022）が、今年度の特色として、ポストコロナを視野に入れた対面での活動がOUマルチリンガルプラザで本格化したこと、そして、部局を超えた連携の機運がさらに高まったことが挙げられる。本稿ではこれら2点に着目しながら2022年度の活動について報告し、今後の課題と展望を述べる。

*　大阪大学国際教育交流センター教授
†　大阪大学国際教育交流センター特任助教
‡　大阪大学国際教育交流センター准教授
§　フリーランス
**大阪大学国際教育交流センター特任講師

2　OU マルチリンガルプラザにおける日本語学習支援の現状

OU マルチリンガルプラザは、大阪大学で専攻語として学べる25言語の自律的な言語学習を支援することを目的としたセルフアクセスラーニングセンター（SALC）で、言語学習に関するリソースの紹介や言語学習アドバイジングなどを実施している。2020年 4 月に豊中キャンパス（サイバーメディアセンター4 階）の施設が運用開始され、2022年 4 月には吹田キャンパス IC ホール 2 階に分室が開室した。豊中キャンパスでは学部生向けの共通教育科目が開講されていることから、豊中の OU マルチリンガルプラザでは25言語の学習支援が主な対象となっているのに対して、吹田分室では CIEE が吹田キャンパス IC ホールで提供する留学生対象の日本語授業と関連させ、日本語の学習支援を中心的な業務としている。本節では、開室と同時に COVID-19 の影響を受けた OU マルチリンガルプラザの運営とサービスの拡大、利用者層、施設内で活動する大学院生の TF（ティーチング・フェロー）および TA（ティーチング・アシスタント）の声、OU 日本語ひろばの活用、今後の課題について述べる。

2-1　OU マルチリンガルプラザの運営とサービスの拡大

2022年12月現在、OU マルチリンガルプラザで日本語を学ぶ留学生向けに行われているのは、アドバイザーによる日本語学習アドバイジング（1対 1 での言語学習に関する相談対応）、ポートフォリオワークショップ（言語学習ポートフォリオの作成を通じて、言語学習の目標設定や計画立て等を行う）、TF/TA による会話練習パートナーとのセッション（1回20分の 1 対 1 での会話練習）、チュータリング（レポート、論文、研究計画書等、アカデミックライティングに関する添削や助言の提供）、グループ会話のサロン（好きな時に来室して自由会話を行う）の 5 種類である。これらの活動は全てが設立当初から行われていたわけではなく、利用者のニーズや意見を聞きながら、徐々に活動のバラエティを充実させている。開設準備段階から2022年度までの変遷を時系列に沿って整理すると、以下のようになる。

2019年度には開室準備として、文献調査と他大学の SALC への視察を行い（瀬井，2020）、OU マルチリンガルプラザで提供するサービス内容を検討した。その検討内容とは、まず、SALC に求められる 9 つの要素（1）学習リソース、（2）個別学習エリア、（3）グループワーク用エリア、（4）学習支援デスク、（5）アドバイジング・サービス、（6）ライティングや発音など特定のスキルを上達させるための専門家によるサポート、（7）学習法などについてのワークショップや催し、（8）学習者ができるだけ自然な環境で目標言語を使えるような機会、（9）学習共同体の形成（関谷，Mynard，Cooker，2010）をどのように展開するかであった。また、大阪大学の規模や特色に合わせたものにするためにどうすればよいか、オンラインと対面の活動の棲み分け、学内で他部局が行っている支援活動との兼ね合いをどうするかについても検討を行った。その結果、初年度は、ウェブサイトへの学習リソースの掲載、言語学習アドバイジング・サービスの提供、施設利用者の学習をサポートする大学院生 TA の配置、施設内への個別学習エリア、グループワークエリアの設置、を行うこととした。

しかし、2020年 4 月の開室と同時に COVID-19 による緊急事態宣言が発令され、大学の授業もオンラインに切り替わった。それにより、予定していた対面での施設利用は叶わず、施設の受付および活動のサポートを行う予定であった TA は、ウェブサイトに掲載するための情報収集やコラム執筆業務にあたった。言語学習アドバイジングのみ、対面からオンラインへの切り替えが容易であったことからオンラインにて実施した。秋～冬学期には、オンライン参加のための申込みフォームを整備し、TA 向けの対応マニュアルを作成してオンライン会話練習も開始した[2)]。また、学習法などについてのワークショップやワークショップへの参加を通じた学習共同体の形成が促せるよう「大阪大学言語学習ポートフォリオ」を作成し、発行した。

2021年度も対面での活動は叶わず、オンラインでの活動のみとなった。新たに、ライティングに悩みを抱える学生を対象としたチュータリングと、グループで言語学習の目標や計画について話し合う言語学習ポートフォリオワークショップを開始し、継続サービスである日本語学習アドバイジング、会話練習と並んで、学習者が個々のニーズに合ったサービスを選び、利用できる体制を整えた。TA からも様々なアイデアが出され、TA 3～4 人が協力して、「日本語テーブル」などグループで会話ができるイベント

が企画され、学期期間中に２～３回実施された。ワークショップや院生企画のグループ会話により、１対１の会話練習だけでなく、学習者同士が知り合う場の提供が可能となった。

2022年４月、大阪大学の活動基準が緩和され、OUマルチリンガルプラザの開室後、初めて様々な活動を対面で実施できる状況となった。また、吹田分室のオープンに伴い、豊中キャンパス・吹田キャンパス両方で、グループでの会話ができるサロンの定期開催を開始した。2020年と2021年は、利用者には学内のオンライン掲示板（KOAN）や施設のウェブサイトやSNS（Twitter と Instagram）でしか広報ができなかったが、対面での活動が開始されたことにより、「施設の前を通りかかって知った」「クラスメイトから聞いた」といったきっかけで施設に来る学習者が増えた。また、実際の活動が見学できる状況が生まれ、アドバイジングセッションを利用した学習者がチュータリングに興味を持つ、会話練習に参加した学習者がサロンにも参加する、など提供サービス同士が有機的に繋がるようになった。対面の活動が可能になっても、対面とオンラインが選択できるようにして、キャンパスが異なる学習者や対面活動に抵抗のある学習者にも参加の機会を提供するよう配慮した。また、レポートや原稿の添削を行うチュータリングについては、セッション時に該当の原稿を画面で共有し、チューターがコメントをつけたファイルをそのまま保存して利用することができるオンラインセッションの方が適していることから、オンラインのみの実施とした。

2-2　利用者層

１節で述べた通り、大学内で日本語を学ぶ留学生や研究員の学習目的や目標、学習を進めるペースは多様である。そのためOUマルチリンガルプラザでは、多様なニーズに応えられるように上述の５種類のサービスを提供している。表１が2022年春～夏学期のサービス別の参加者数である。

次にサービスごとの特徴を述べる。アドバイジング（図1）は、情報科学研究科の37％を筆頭に、文系・理系を問わず様々な研究科・学部からの参加があった。また、レベルや学生身分も初級から超級レベル、正規留学生、交換留学生、大学院生、研究生と様々である。相談内容には、生活上で必要なサバイバル日本語を身につけたい、口頭能力を上げたい、

表1. サービス別参加者数

豊中キャンパス（対面）		
1	会話練習	43 （うちオンライン25）
2	日本語学習アドバイジング	19 （うちオンライン3）
3	日本語学習ポートフォリオワークショップ	6
4	TAによるイベント	7
吹田キャンパス（対面）		
5	OMPICサロン	37
オンライン（Zoom）		
6	日本語チュータリング	20
		合計　132名

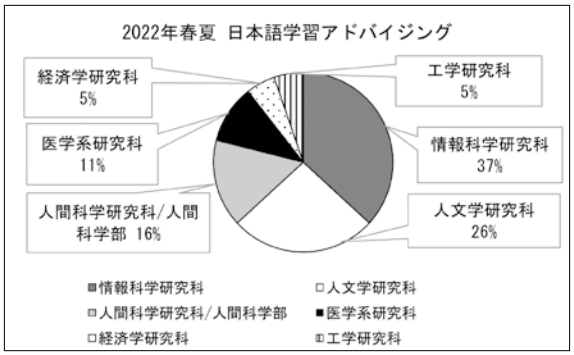

図1. 所属別割合（日本語学習アドバイジング）

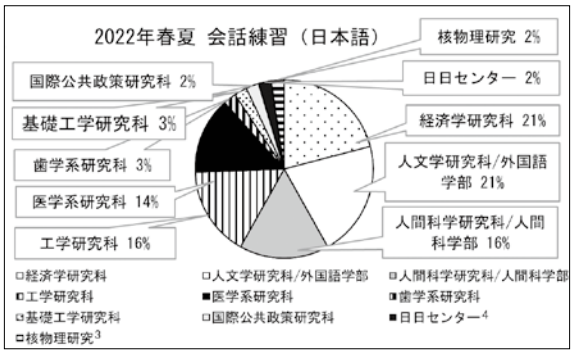

図2. 所属別割合（会話練習）

ひとりで教科書を使って学習を進めたいので、教材や学習方法についてアドバイスが欲しいなどがあった。

会話練習（図2）は、経済学研究科、人文学研究科をはじめ文系・理系を問わず10部局からの参加があった。日本語レベルは、学習をはじめたばかりの学習者や上級レベルの学生は少なく、少し話せるようになったレベルの学習者が、自信を持つために練習したいというニーズが多かった。参加動機には「COVID-19の影響を受け、学内で日本人学生と話す機会

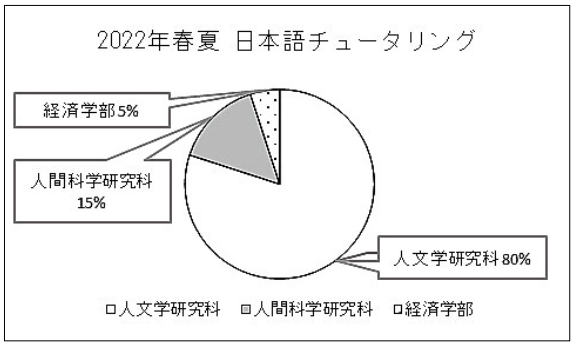

図3. 所属別割合（日本語チュータリング）

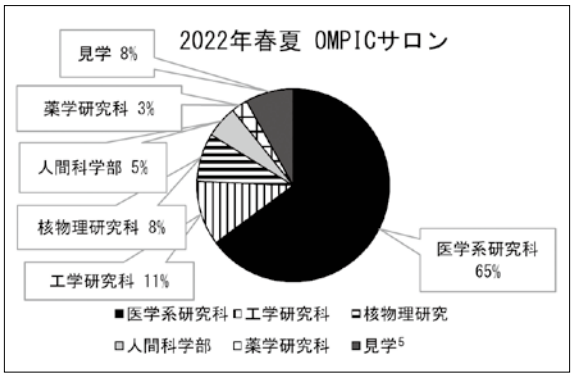

図4. 所属別割合（サロン）

が少ない」「研究室の共通言語が英語のため、日本語を話す機会が欲しい」というものが多かった。会話の中で、日本人学生ともっと交流する場が欲しい、という相談も多く、セッションの中でTF/TAが学内の交流の場を紹介する、自信を持って研究室で話しかけてみてはどうかと励ますなどの場面も見られた。

チュータリング（図3）は、アカデミックライティングのサポートであることから、日本語で論文を書く人文系の大学院生が利用者の95%を占めている。「日本語でまとまった文章を書くのが初めてで自信がない」「自分が書いた文章を誰かに読んでもらってコメントをもらう機会がない」「自分が伝えたい内容がきちんと日本語で表現できているかを見てほしい」という相談が多い。

サロン（図4）は、事前に大まかにトピックを決めて開催日と時間とともに広報を行い、グループでの会話をすすめる。トピックは「日本で行きたい場所」「日本の生活で知りたいこと」「日本でしたいこと」などであった。春～夏学期は理系の研究室が多い吹田キャンパスのみで開かれていたことから、参加者の所属は医学系研究科65%、工学研究科11%、核物理研究科8%と、全体の約9割を理系の研究科が占めている。レベルは会話練習と同じで少し話せるようになった学習者が多く、友達同士で誘い合って来たり、会話練習の後に参加したりする姿が見られた。秋～冬学期からは豊中キャンパスでも開始した。豊中キャンパスは共通教育科目として日本語の授業を受けている学部生の参加が多く、吹田キャンパスでは春～夏学期と同様、理系の研究者と大学院生の参加が多かった。

2-3　施設内で活動するTF/TAの声

会話練習、チュータリング、サロン、とTF/TAが関わる活動の内容はそれぞれ異なるが、共通しているのは一方的に「教える」のではなく、学習者がそれぞれの学びをメタ認知的に捉えられるように働きかけるアドバイジングの理念（加藤・マイナード, 2022）に基づいた対話をすることである。TF/TAには、日本語を母語とする学生と日本語を第二言語とする留学生の両方がおり、利用者の日本語学習のサポートにあたっている。学期はじめにはオリエンテーションを実施し、学期終わりには振り返りのミーティングを行うが、日々の対応記録は振り返りをして共有できるスプレッドシートに書き込み、連絡事項はチームコミュニケーションツール（Slack）で情報を共有している。また、施設内で対応に迷うことや相談があればその都度関係者で話合いを行った。2022年度に活動するTF/TAとのミーティングや振り返りの記録からは、以下のような対応時の工夫や気持ちの変化が窺える。

チュータリングでは、事前送付された原稿をもとに、どのようにセッションを進めたかの工夫が主に報告された。その内容とは、

- 参加者が不安に思っている点をまず聞き、それについて答えた
- どのようにしたらより良くなるかについて肯定的な言い方を心がけた
- アドバイスをする際は、本人がどのように勉強しているかを聞き、それを踏まえた提案をするようにした
- チュータリングを遠慮せず活用してほしいことを伝えた、漠然と不安を感じているようだったので、言いたいことはちゃんと伝わったということを理由とともにしっかり伝えた

などである。

会話練習は、2-2で述べたように、日本人学生と

もっと交流する場が欲しい、という相談に対して、TF/TA は悩みに共感し、励ます役割を担っていた。また、日本語を第二言語とする TF/TA の場合、自分が日本に来たばかりの頃を思い出し、どのように問題を解決したかを伝えたり、自身の学習経験なども交えてより良い方法を提案したりする場面も見られた。学内の交流の場については、他部局との連携（後述）を強化することにより、今後より一層のサポート体制を整えることが課題となっている。

サロンは、今年度初めての試みである。理系の大学院生や研究員からは、実験や研究室のミーティングが長引くこともあり、予約不要の方が参加しやすいという声があり、予約不要のグループ会話であるサロンを開始した。しかし、会話練習やチュータリングと異なり、参加者の予想ができず、その日に来た参加者と会話を進めた後、振り返りを行い、翌週の活動に繋げて準備を行うという運営方法であったため、日報には反省点が記されることが多く、何度も TF/TA ミーティングを行った。例えば、「また来週来ます」と帰った参加者が、研究の忙しさにより 2 週間来られないケースがあると、前回の対応が悪かったのではないかと話し、参加者が 1 人だけだった日には、グループ会話を期待していたのに期待外れだと感じたのではないか、と TF/TA が自信を無くす場面もあった。また、日本語を第二言語とする留学生 TA からは、日本語ネイティブではない自分が対応者であることに対して参加者はがっかりしたのではないかという声もあった。しかし、学期開始から数週間経つと、参加できない期間があった学習者が戻ってきたり、常連となった参加者からサロン後にお礼のメールが届いたりするようになり、TF/TA が自信を持って対応できるようになっていった。また、振り返りのミーティングで留学生の TA から「日本の情報」のようなトピックを設定すると、詳しいことを聞かれた場合に自信が持てないという声があり、TF/TA が自信を持って話せるトピックを選定したり、参加者と一緒に語彙を増やしていけるような方法を取り入れたりした。これらは、経験を積み、何度も行ったミーティングにより生まれた変化であった。

2-4　OU 日本語ひろばとの連携

OU 日本語ひろばは、日本語学習に関する情報を集約して提供するポータルサイトである。学習用教材・リソースの紹介や学習方法の解説コラムに加えて、学内外で実施されている日本語教室や学習サポートの情報も一元化して提供している。

開発段階では、活動内容の広報や利用者間の交流促進を目的とする LMS（Learning Management System）や SNS 機能も構想に入っていたが、COVID-19 の影響で大学の教育活動全体のオンライン化が急速に進み、様々な情報が大学共通のオンラインプラットフォームである履修システム（KOAN）に掲示されるとともに、学生もそこに日常的にアクセスするようになった。それにより、言語学習サポートの情報のみを別のプラットフォームから発信することの意義が薄れ、留学生向けの情報も KOAN の掲示板を活用して実施状況やイベント情報などを広報することが効果的となった。そこで、OU 日本語ひろばに実装予定であった掲示板の機能、例えば OU マルチリンガルプラザで実施している日本語学習者向けのサポート情報の発信は KOAN で行うこととした。一方、実際にプラザの活動に参加した利用者への対応では、学内外の学習の機会や場に関する情報が集約されているという、OU 日本語ひろばの利点が発揮された。言語学習アドバイジングやワークショップのセッションの中で、課外の日本語学習についての情報提供を行う際の参照元として活用することが増えていったのである。

LMS の機能に関しては、活動内容の周知・広報に加えて、当初は e ポートフォリオなどの学習管理の側面も構想されていた。これについては引き続き情報収集や検討を進めているが、大学全体でも 2022 年 4 月に「データに基づいた個別最適学生・学習支援を入学前から卒業後・修了後まで本学学生一人ひとりに提供することと、蓄積したデータや情報を分析することにより大阪大学の教育成果を短期のみならず中長期的にも可視化するため、デジタル技術を最大限に活用して学習者本位の教育の推進と教育の質保証の更なる充実を企図」するスチューデント・ライフサイクルサポートセンター（SLiCS）が発足する（上述の引用は SLiCS ホームページによる[6)]）など、教育の DX 化が進められつつある。このような状況を鑑みると、言語学習に特化した学習管理機能を OU 日本語ひろばに搭載するよりも、全学的に利用可能な LMS を活用した方がより効率的で持続可能性が高いとも考えられる。これについては大学全体、あるいは他大学や社会全体の DX 化の動向も見据えながら、中長期的な視点での検討が必要である。

図5. Twitter を用いた情報発信の例

最後に SNS 機能に関しては、OU 日本語ひろばには実装していないが、Twitter や Instagram で、OU マルチリンガルプラザの活動内容や予約状況に加え、おすすめの学習方法の紹介などの情報発信が行われている（図5）。

また、2-3 でも述べたように、TF/TA の活動報告や振り返りの共有には Slack を用いている。これらを今後さらに活用することで、OU マルチリンガルプラザのスタッフ・利用者双方が参加するネットワークやコミュニティの構築・充実に寄与することが期待される。また、教員や TA/TF など運営側からの情報発信だけでなく、利用者の声をすくい上げ、相互交流につなげていく仕組み作りも求められている。

3　学内各部局との情報共有・意見交換会の実施

本稿やこれまでの報告（義永他, 2020; 2021; 2022）では CIEE が実施している日本語学習支援について述べているが、学内には CIEE 以外にも言語学習支援や交流促進に取り組む部局が多数ある。また、CIEE 内でも、日本語教育研究チームが担当する日本語学習支援に加え、留学を希望する日本人学生と英語が堪能な留学生をマッチングし、英語学習をサポートする短期プログラム開発研究チームの活動（Project HELP!）や、アドバイジング研究チームのサポートの下、学生サークル（国際交流団体 B.S.P.（Brothers and Sisters Program）と大阪大学留学生会（Osaka University International Student Association; OUISA））が企画するイベントや交流活動等、様々な取り組みが行われている。これまで、これらの取り組みについては、各部局に了解を得て OU 日本語ひろばおよび OU マルチリンガルプラザ HP にリンクを貼り、情報提供を行ってきた。しかし、近接する趣旨で行われている複数の活動が同じ曜日・日時で行われており参加者の利用機会が限られてしまう、それぞれが個別に企画・実施しており横のつながりが限定的である、などの課題があった。これについて、CIEE 主催で2022年12月23日に「学習・学修支援、多言語・多文化交流促進に関する情報共有・意見交換会（以下、意見交換会）」を開催し、豊中・吹田・箕面の 3 キャンパスから 9 部局が参加した（表2）。

表2. 学習・学修支援、多言語・多文化交流促進に関する情報共有・意見交換会の参加部局と取組名称一覧

部局名	取組名称
文学部・人文学研究科	タンデム学習プロジェクト（Osaka U Tandem）
外国語学部・人文学研究科	Academic English Support Desk
基礎工学部・基礎工学研究科	留学生相談室
工学部・工学研究科国際交流推進センター（資料提供のみ）	ランゲージサポートデスク
工学部・工学研究科国際交流推進センター（同上）	理工系日本語教室・サバイバルジャパニーズコース
核物理研究センター	OCJ program
附属図書館	ラーニング・サポートデスク
全学教育推進機構	多言語カフェ
マルチリンガル教育センター	OU マルチリンガルプラザ
日本語日本文化教育センター	外国人研究者等との異文化間コミュニケーション実践　入門編
国際教育交流センター（短期プログラム開発研究チーム）	Project HELP!
国際教育交流センター（アドバイジング研究チーム）	B.S.P.（日本語カフェ、英語カフェ、中国語カフェ）
国際教育交流センター（日本語教育研究チーム）	OU マルチリンガルプラザ、OU 日本語ひろば

意見交換会では、参加者がそれぞれの取り組みの概要を 1 件 5 分程度で紹介した後、活発な意見交換が行われた。当日出された質問や意見交換の概要をまとめると、以下のようになる。

【質問 1】文・社会科学系大学院生の日本語論文指導

の必要性が指摘されているが、対応している部局・取り組みはあるか。【質問１への回答】附属図書館のラーニング・サポートデスクやOUマルチリンガルプラザのチュータリングで対応している。研究科によっては、大学院生をチューターとして配置している場合もある。

【質問２】日本語カフェ、英語カフェなどの会話中心の交流を実施する際に、参加者のレベル差にどのように対応しているか。

【質問２への回答】CIEEの言語カフェでは、テーブルごとに「初級」「中級」「上級」のように場所を分けて座ってもらうようにしている。

【意見１】教職員だけでなく、留学生など学生側が持ち込んで企画をしているのは非常に良い。ただし、部局が違うと接点が取りにくく、情報が十分伝わらない部分があるので、さらに広報や情報共有に力を入れていく必要がある。

【意見２】各取り組みの開催場所・日時等を部局間で共有できる仕組み作りが必要である。

【意見３】意見交換会を継続して定期的に意見交換の場を持つとともに、メーリングリストやSlack、Googleスプレッドシートなどを用いて、それぞれの活動の概要や予定を共有するようにしてはどうか。

【意見４】今回のように部局を超えて、現場の担当者が直接話し合う場が設けられたことは画期的である。それぞれの取り組みを一覧にした報告書を作成し、全学的にも報告やアピールの機会を持つようにしてはどうか。

このように、活動内容や運営方法に関する情報やノウハウの共有に加え、これらの取り組みを利用者や大学の関係者に向けて広くアピールしていく必要性が指摘された。

4　今後の課題と展望

以上のように、今年度はOUマルチリンガルプラザの対面での活動が本格化するなど、ポストコロナを見据えた展開が始まる１年となった。本節ではむすびにかえ、「OUマルチリンガルプラザの活動の充実」および「他部局との連携・協力体制の構築」の２点について、今後の課題と展望を述べる。

4-1　OUマルチリンガルプラザの活動の充実

2-1で述べた通り、OUマルチリンガルプラザは、開室後に利用者のニーズや意見を聞きながら、３年間で徐々に活動のバラエティを充実させてきた。これらの活動により、それぞれの提供サービスには、利用者に特徴があることが明らかになってきた。今後は、各サービスへの参加希望者がより参加しやすくなる仕組み作りとTF/TAの育成が重要となる。これまでは、サービスを拡大してきたものの、COVID-19の影響を受け、開室前に想定していた運営とは大きく異なる状況下での運営となった。今年度初めて対面での活動が可能となったことで見えてきた課題も多い。対面とオンラインでのサービス提供の棲み分けの検討のみならず、学内の各部局で提供されている取り組みとの違いを明確にして運営することや、類似サービスがある場合は重ならないよう、開催曜日と時間を検討する必要がある。また、TF/TAの育成については、これまではオリエンテーションで運営についての説明を行った後、問題が起きた時に個々にミーティングを開いて対応してきた。これからは、担当のサポート、例えばサロン担当のTF/TAがサロンのことだけを考えるのではなく、OUマルチリンガルプラザ内の様々なサービスに目を向け、ひいては施設内のみならず、他部局のサポートも視野に入れた対応ができるようなオリエンテーションを実施し、情報共有の仕組みを作っていく必要がある。また、過去の対応事例や工夫点など、知見の蓄積を活かして、「学習者に注目する」「オープンマインドを保つ」「中立的な立場を取る」といった言語学習アドバイジングの原則（加藤・マイナード，2022）に基づいた対話を通したサポートができるような研修の実施が必要である。すでに学内では、学際融合教育科目として言語学習やその支援に関連した科目がいくつか提供されているが[7]、こうした科目の履修を推奨するとともに、OUマルチリンガルプラザでの活動に即したOJT的なトレーニングや、TF/TA間の学び合いをさらに促進していくことが望まれる。

他大学の活動に目を向けると、学生（TA）が自発的に結成したスタディ・グループが学生自身の研究活動とも連携し、自律的な学びを促進するとともに、彼／彼女らのティーチング能力の育成にも寄与していることを指摘したHayashi and Wolanski（2021）や、トレーニングプログラムを「専門家としての期待の確立」「基本的な手続きと英語のトレーニング」「知識構築」「利用者支援のトレーニング」「メンタートレーニング」の５つの段階に分けた上で、学生スタ

ッフトレーニングの５つの原則（「学生を個人として認め、各人に応じた役割・トレーニングの形態や内容を調整する」「トレーニングの各段階を特定し、優先順位をつける」「効果的なデータ管理システムを構築する」「学生スタッフ間の実践共同体（community of practice）の発達を促す（が、強要しない）」「パワーダイナミクスを意識し、学生スタッフに発言権があるかどうかを考える」）を示したMoore and Tachibana（2015）の指摘等が参考になる。またMurray（2018）は、SALCをソーシャルラーニングスペースと捉え、ビジョンの構築・変化への適応・空間デザイン・分散されたコントロール・学生同士の交流・相互扶助的な関係といった観点から捉えられる複雑でダイナミックな生態社会システムであると述べている。大学側や教員があらかじめ定めた活動を行うだけでなく、参加者間の相互交流を通じた学び合いの場を提供したり、学習・交流活動を企画・実施する実践的な活動を通して、TA/TFの成長を促したりする点に、OUマルチリンガルプラザの今後のさらなる発展可能性があるといえるだろう。

4-2　他部局との連携・協力体制の構築

3.でも述べたように、今年度は学習・学修支援、多言語・多文化交流促進に関する活動を行う部局が初めて一同に会し、情報共有や意見交換を行う場を設けることができた。この会は参加者にも好評で、「学内でこんなにたくさんの取り組みが行われているとは知らなかった」「他の部局の取り組みの様子がわかり、参考になった」「こうした取り組みを継続させるとともに、次回はいくつかの活動に焦点を絞り、理念や運営ノウハウなどの詳細について意見交換する場を設けてほしい」などの感想を聞くことができた。今回は１回目ということで、顔の見える関係性を作ることを意図して対面会議の形で実施したが、今後はオンラインでの会議開催やオンラインのプラットフォームを用いた情報共有など、より参加者にとって負担の少ない参加形態を検討した上で、さらなるネットワークや連携・協力体制の構築に取り組みたいと考えている。

注

1）本稿はJSPS科研費基盤研究（C）19K00708「大学における日本語自律学習支援者養成プログラムの開発」の研究成果の一部である。

2）大阪大学の活動基準が緩和され、2020年10月から12月の２ヵ月は対面での参加も可としたが、開講されている授業の多くがオンライン授業であったため、来学者は少なく対面の参加希望者はほとんどいなかった。

3）正式名称は「核物理研究センター」。

4）正式名称は「日本語日本文化教育センター」。

5）学内の教職員・学生の見学があった。

6）https://slics.osaka-u.ac.jp/（2022年12月27日確認）

7）2022年現在、グループディスカッションを通じて自律的な言語学習のプロセスを実際に体験する「第二言語学習方法論」、言語学習アドバイジングに関する講義と実習を行う「言語学習アドバイジング入門」、アカデミックライティングのスキルや客観的な評価方法を身につけることを目指す「学術的文章の作法とその指導」などが開設されている。「第二言語学習方法論」と「言語学習アドバイジング入門」の詳細については、義永他（2022）参照。

参考文献

Hayashi, H. & Wolanski, B.（2021）Teaching Assistant-led study groups as a platform for language learning: Providing new opportunities for student staff in Kyushu University's Self-Access Learning Center（SALC）.『基幹教育紀要』7，九州大学基幹教育院，pp.131-141

Moore, A. R. & Tachibana, M.（2015）Effective training for SALC student staff: Principles from experience. *Studies in Self-Access Learning Journal,* 6（4），pp. 444-460

Murray, G.（2018）Self-access environments as self-enriching complex dynamic ecosocial systems. *Studies in Self-Access Learning Journal,* 9（2）, pp. 102-115

加藤聡子，ジョー・マイナード（著），義永美央子・加藤聡子（監訳）（2022）『リフレクティブ・ダイアローグ――学習者オートミーを育む言語学習アドバイジング――』大阪大学出版会

瀬井陽子（2020）「これからのSALC（Self-Access Learning Center）の意義と課題」『多文化社会と留学生交流』第24号，pp.19-26

関谷康，Maynard, J. & Cooker, L.（2010）「学習者の自律を支援するセルフアクセス学習」小嶋英夫，尾関直子，廣森友人（編）『英語教育学体系第６巻成長する英語学習者――学習者要因と自律学習――』大修館，pp. 193-212

義永美央子，角南北斗，瀬井陽子，難波康治（2020）「日本語の自律学習を支援するオンラインプラットフォーム『OU日本語ひろば』の開発について」『多文化社会と留学生交流』第24号，pp.27-34

義永美央子，瀬井陽子，難波康治，角南北斗，韓喜善（2021）「日本語学習支援の全学的な展開に向けて――OUマルチリンガルプラザとOU日本語ひろばの実

践報告──」『多文化社会と留学生交流』第25号，pp.55-61
義永美央子，難波康治，瀬井陽子，角南北斗，韓喜善（2022）「リアルとバーチャルを結んだ日本語学習支援の取り組み──3年間の総括──」『多文化社会と留学生交流』第26号，pp.41-53